

春日大社における社家日記調査

三輪 眞嗣

平成 25 年度より、奈良県に所在する春日大社において同社が所蔵する神事日記の調査を開始した。この調査は東京大学史料編纂所の藤原重雄氏がおこなってきた。平成 25 年度からは横内裕人（京都府立大学准教授）と中世史専攻の大学院生が参加している。

調査の対象となった史料は中世から近世にかけての神事日記 500 点余りで、この他に神供関係の日記や記録の断簡類も対象に含まれている。これらの史料は主に中臣家や大東家など春日社家に伝来した日記群から構成されており、中世後期～近世にかけて春日大社で執りおこなわれていた神事や組織・運営、経済基盤を見る上で不可欠な史料群といえる。中世のものには卷子装が数点存するが、ほとんどが袋綴装の冊子である。ほかにも折紙横帳が数点ある。なかには虫損が進行し、開披不能な冊もいくつか存在する。注目すべきは調査の過程で、同一人物が複数の日記に新たに表紙を補い、裏打ちを施すなど、日記を修補した跡が認められ、近世における社家の史料の修理・保存と伝来を考えるにあたって、興味深い事例となる。なお、近代に入ってから日記（日誌）の作成は継続しているが、今回は明治八年（1875）までを対象としている。

中世の日記は 70 点ほどあり、ほとんどが 16 世紀のもので、それ以外の大部分は近世の成立になる。ただし近世の日記中には抜書形式のものもあり、散逸した記事が含まれている可能性もある。また、近世末から明治にかけての日記も興味深く、興福寺僧の還俗に言及したものや、黒船来航時に鎌倉時代の日記、「中臣祐賢記」を参照したことが記されたものなどがある。詳細な日記の内容はさらなる調査が俟たれる。

これらの史料群は『春日神社記録目録』（1929 年、官幣大社春日神社社務所）において存在と概要は知られていたが、今回の調査では歴史的価値を判断するに必要となる詳細な書誌データを記録するため、日記一点毎に調書を採り直す作業から始められた。調書に題（外題・内題・仮題）・欠損・員数・成立年代・体裁・料紙・表紙（共紙原表紙・別紙原表紙・後補表紙・新表紙）・紙数・法量・記主・首題・表紙墨書・奥書・収録年代・備考（印記・紙背文書など）の項目を設け、それぞれ担当した調査者が記入し、PC 上の目録に入力・統合していった。調書の作成・入力は平成 27 年度までに終了し、平成 28 年度からは調書の点検作業に入り、平成 28 年 10 月まで 5 回の調査を実施し、点検も一通り終了した。現在は調書の補充・確認や表記の統一、断簡の復原作業などを並行して進めている。

本調査で春日大社宝物殿の松村和歌子氏・渡邊亜祐香氏のご高配を賜りました。末尾ながら御礼申し上げます。